政務活動費活動報告（視察）「ワンヘルス推進」の取組について

(1) 出席者（会派名・個人名）
公明党彦根市議団　上杉正敏　中野正剛

(2) 実施日：令和８年２月１６日　１３時３０分～１５時

【１．調査の目的】

(1) 本市における現状
ワンヘルスは「人の健康」「動物の健康」「環境の健全性」を一つの健康と捉え、一体的に守っていくという考え方である。このような考え方を基にしたワンヘルスの取組が彦根市では実施されていないのが、現状である。

(2) 本市における課題
これからの時代においてワンヘルスの取組を彦根市にとってどのように進めていくのかが今後の課題である。

【２．調査地選定理由】

(1) 調査項目
ワンヘルスの取組について

(2) 選定地１：福岡県みやま市
全国でいち早くワンヘルスの取組を実施された市である為。

【３．調査結果】

(1) 内　容
今回の行政視察は全国でいち早くワンヘルスの取組を実施された福岡県みやま市を訪れワンヘルスを学んできた。みやま市は平成１９年に山門郡瀬高町・山川町・三池郡高田町の３町合併により誕生した市である。
みやま市のワンヘルスの取組については、１．ワンヘルスの推進に取り組んだ背景　２．みやまワンヘルス（本市の具体的な取組）３．ワンヘルス推進の成果と課題を紹介する。
　まず最初の１．ワンヘルス推進に取り組んだ背景であるが、平成２８年に北九州市で「第２回世界獣医師会-世界医師会 OneHealth に関する国際会議」が開催された。そこで「福岡宣言」が採択されたのがきっかけとなった。令和２年に全国初の「福岡県ワンヘルス推進基本条例」が可決し翌年施行。翌年全国初「ワンヘルス推進宣言」を表明。令和４年全国初の「ワンヘルスセンター」建設を発表。令和９年に供用開始予定。これまでの取組においては、蔵内獣医師会長（全国県議会議長）と横倉県医師会会長のご尽力と聞いている。
　続いて２．具体的な取組であるが、全国初の「ワンヘルス推進宣言都市」に市議会による「ワンヘルス推進に関する決議」がされ、市では「ワンヘルス推進宣言」を２０２

１年９月に表明された。ワンヘルス推進体制として総合推進室を設置。推進行動計画を５カ年計画で策定。推進行動計画の基本指針は７つの柱からなっている。①　健康と命を守る　②動物との共生　③食育・地産地消　④環境保護　⑤みやま市の魅力向上　⑥ワンヘルス実践の基盤づくり　⑦ワンヘルスセンターの活用である。

ワンヘルス推進の特徴的な取組として環境保護とワンヘルス実践の基盤づくりがある。環境保護では、メガソーラー「みやま発電所」の稼働、みやまスマートエネルギー（株）設立、バイオマスセンター「ルフラン」の稼働、「ゼロカーボンシティ」宣言がある。

基盤づくりでは広報や SNS 等を活用した普及啓発やワンヘルス楽校や出前講座、ワンヘルスフェスティバルがある。ワンヘルス教育の実践としてみやま市小・中学校教職員研修会を実施している。

最後に３．ワンヘルス推進の成果と課題であるが＃みやまワンヘルスがある。ワンヘルス推進における工夫として全職員に対するワンヘルス研修の実施、既存の事業にもワンヘルスの視点を持つ、県の制度を活用するなどがある。ワンヘルス推進における成果・効果では、ワンヘルス教育の実践による意識改革、教育を受けた子供たちから家族等への普及活動、各種団体等のつながりを大切にしている。ワンヘルス推進における課題では普及啓発が最も難しいとのことである。令和９年には全国で初めての「ワンヘルスセンター」が福岡県の建物としてみやま市にできる予定である。この建物によってこれまで以上の活動が期待されている。

(2)　考　察

今回のみやま市におけるワンヘルス推進の取組を現地で学んで一番に感じたことは、市民一人一人がワンヘルスの取組を実践しているのがうかがえた。その一つの例として市内の小学生がワンヘルスの取組として「私は毎朝挨拶をすることを心掛けています」と言ったことである。挨拶をすることによりお互いが気分よくなり物事が前に進むということである。ワンヘルスの取組とは、何かものを作ったり地球の環境を考えることだけではなく挨拶をするといった身近なところにも人の健康がはぐくまれることを学んだ。彦根市としてもこれまで「人の健康」「動物の健康」「環境の健全性」などを全くやってこなかったわけではないが、ワンヘルスの取組としてはゼロであった。

今回みやまワンヘルスを学んできたが、先ずはお金をかけずとも出来るワンヘルスの取組を彦根市でも取り組んでもらいたいと考える。その為にも我々議員がワンヘルス推進の起爆剤になるように努力してまいりたい。

政務活動費活動報告（視察）

(1) 出席者（会派名・個人名）

公明党彦根市議団　上杉正敏・中野正剛

(2) 実施日：

令和８年２月 17 日（火）

【１．調査の目的】

(1) 本市における現状

彦根市においても子どもの職業理解には小学校の「職場見学」や彦根市立図書館が開催している「お仕事セミナー」があり、働くことの大切さや社会に貢献する喜びを学んでもらう機会を設けている。

(2) 本市における課題

上記のように、子どもに働くことの素晴らしさを知ること、自分がどういう仕事を目指したいのか夢を持つこと、そして、それを実現するには学校で友人と共に学んでいくことの大切さを知る絶好の機会になる職場体験のはずだが、そこまでは現状の取組では実現されていない。

【２．調査地選定理由】

(1) 調査項目

むなかた子ども大学

(2) 選定地１：

福岡県宗像市

【３．調査結果】

(1) 内　容

宗像市では、子どもたちが自身の可能性を広げたり、新たな可能性を発見し、興味・関心を深堀して「志」を育むため、教育関係者・企業・団体・市民・行政等が総がかりで「本物から学ぶ」「本物を体験する」機会をとおして、学校教育における「キャリアプランニング能力」の向上に向けた取組として、むなかた子ども大学を開催している。

子ども大学は１年に１回､メインキャンパスを市内にあるグローバルアリーナで約 35 の講座を同時開催し、１つの講座を選択して４コマ、約４時間の時間をかけて講座の内容を深く学ぶ仕組みを設けていた。

また、特設講座を市内・市外の事業者施設等で開催、そこに市内在住の小中学生が参加して、職業・技能に係る講座を受けていた。更にそれを不登校児童生徒の学びの場としても活用していた。

他にも市内全小学校で１年に１回、子ども大学の日を設けて学習成果を発表したり、夏の課外授業を設けて事業者や団体が主体となって講座が開催されており、まさに官民一体となった取組を行っていた。

そして、この取組を通して、子どもたちの自己理解、職業理解、啓発的経験をしても

らい、働くことの素晴らしさや、自分が大人になったらしたい職業を深く知ることにより、自分の夢をもって学ぶことの大切さを理解してもらうきっかけになるよう、子どもたちの後押しをしていた。

(2) 考　察

この子ども大学には市内在住の小学生のうち、18.1%が応募し、定員と比較すると123%が応募していた。また、その応募した講座の満足度は99.6%にのぼり、第13回キャリア教育推進連携表彰最優秀賞を受賞している。

宗像市は北九州市と福岡市の中間に位置しており、県のベッドタウンとして発展してきたが、様々な職業に触れる機会が都市部より少ないため、子どもたちの勤労観・職業観を育むことが困難であることから、宗像市だけでなく、北九州市や福岡市にある企業や行政にも働きかけて、サッカー、航空会社、アナウンサー、パティシエ、自衛隊、介護士など様々な講座を開設して子どもたちが大人になったらなってみたい職業を実際に体験してもらうことを目的に、このむなかた子ども大学を開催している。

そして、その取組みは障がい者や不登校生徒にも門戸を開き、また、親からの要請にも答えて、未就学児にも試験的に拡大していた。

今の日本は、「なぜ勉強しないといけないのか」「親がどのようにして働いているのかわからない」など、子どもにとって明確な未来が見えない環境にあるのではないかとも感じる。

その中で、このように自分が大人になったらしてみたい職業を体験して、なぜ今、学ばなければならないのか、また、体づくりをしなければならないかを感じてもらい、子どものやる気スイッチを入れてあげる取組は重要であるし、素晴らしいことだと思う。

また、企業にとっても社会貢献をしている企業というイメージアップやブランドづくりになり、将来、自社に入社してくれて働いてくれるきっかけになるメリットもあるので協力してくれているとの事なので、彦根市でも市内の企業に限定せず、市外の企業にも声をかけて、このような取組をすれば、彦根市の子どもたちにとって最高の生きた体験になるのではないかと感じる。

是非、彦根市でもむなかた子ども大学のような講座を設けて、自分が自分らしく活き活きと勉強やスポーツに目的をもって取組んでいける環境を整備していきたいと感じる視察だった。